# 高田駒次郎君を偲ぶ

硬式野球部監督　藤村　和芳

彼との出会いは、昭和二十三年、校門の片隅で一年先輩の私のところに、野球部入部の申し出を受け、練習の厳しさ、苦しさを説き再考をうながしたが、かの大男が上から見下ろし〝絶対やり抜きます〟と強引に入ってきた。

当時、百道の砂ポコのグラウンドは、怪我が多く、少ない部員での練習はつらかった。彼は持前のねばり強さでメキメキ腕をあげてきたが、まだレギュラーには程遠かった。

ノッカーの同情をかう演技派の丸林金兵衛がいた。やかまし屋の松尾達二がいた。

そして練習のあとの自転車にのぼりを付けた〝チリンチリンのオッサン〟のアイスキャンデーが待ち遠しかった。みんなで小銭を出し合って喰った西新の回転焼はうまかった。

博多どんたくの日は、早朝練習に切り替え、昼から、おふくろの絣（かすり）のきもん、おやじのゆかたを借り、思い思いの衣装で街をねり歩き、新天町の舞台では、各自の持ち芸を披露し出演料をもらったことを思い出す。当時は彼を始め芸達者が揃っていた。

それでも野球は九州一、二を争う強さで、全国大会にも度々出場した。

特に彼は、遠征先や合宿での失敗談が多く、今なら〝珍プレー大賞間違いなし〟といわれるほど、常に愉快な雰囲気をかもし出す、みんなの人気者であった。

大学卒業後彼は、着実に学問の道を極めながら昭和四十二年母校に帰って来た。

早速、野球部長、寮監、高田ゼミと多忙な学校生活の中で、彼の根っからの面倒見のよさ、時には、コラー！「しゃかるーぞ。」とグローブのような左手でパチンと叩き、学生は笑みを浮かべながら、じっと我慢している様子が懐しい。学生との心のふれあいを大事にするその人間性には頭が下がる思いであった。

そして、彼との若い頃からの約束でもあった高田野球部長、藤村監督のコンビは晩年の昭和六十年に実現したものの、神宮大会出場を果たせなかったことが唯一の心残りである。

彼とは最後の最後まで縁が切れず、彼が病床のため、仲人という大役の代役までさせられた。然し彼には、四十数年にわたって大変お世話になった。

そして人生の素晴らしさを教えてくれた彼に、心からお礼を申しあげ、何れ又、天国で逢える日を楽しみに、さようなら。

西南スポーツ155号
（平成４年12月15日）